

「千葉氏を

語る」だよ

令和元年度

第7号

発行・編集

千葉氏を語る会事務局

発行日

令和元年5月1日

恒例のシンポジウム開催

平成三十年十二月二日千葉市民会館に於いて本会恒例のシンポジウムが今回は「千葉氏顕彰会」との共催で開催されました。このシンポジウムのテーマは「千葉氏の女神像」ということで千葉寺の境内に鎮座されている瀧蔵権現神社に関する学術的な解明を諮る見地で千葉寺は真言宗豊山派の寺院であることから、大正大学の講師関口崇史先生の基調講演を戴きましたので、今回はこの講演の概要を紹介します。

一、長谷寺の創建時期

奈良の長谷寺は、新義真言宗豊山派の総本山であり、その創建は八世紀初頭に道明と言う僧侶が建立し、その後僧徳道が十一面観音を本尊とする現在の長谷寺を建立したと言われています。

寺の縁起には、徳道の説話などに「沙

弥」という言葉が多く記されていますが、この「沙弥」とは、「未だ正式に得度、受戒していない修行者が当時山岳などで淨行に励む人々を指して沙弥と呼んだ」と伝えられています。一方、道明は弘福寺の僧侶だったので、徳道が観音創立を発願した時、弘福寺が援助したものとされます。

二、長谷寺と千葉寺の関係について
千葉寺は、真言宗豊山派の寺院であり、寛永十年（一六三三）の「関東真言宗新義本末寺帳」に「本寺宝性院「寺領百石」と記されています。真言宗の密教はその内容を「教相」と「事相」の二つに分類され、事相とは真言密教における實際修行の面のことであり、教相とは、教理的な攻究をさして、両者は表裏一体をなすものであります。

天正十五年（一五八五）に豊臣秀吉によって根来寺が焼き討ちにされた時、宮賢房專誉は難を逃れる為に、

長谷寺に入った。また、弄性房玄宥は京都の智積院に逃れた。と言われています。それでも当時、長谷寺が南都における勢力が顕著であったことが窺えるのであります。

三、長谷寺と瀧蔵権現

さて、本日の主題であります、この瀧蔵権現（奈良ではタキノクラゴンゲンと言う）は鎌倉時代に長谷寺の勧進聖によって編纂された「長谷寺験記」という文書によると、北野天神即ち菅原道真公が当地の初瀬に現れて、この地の地主神であった瀧蔵権現から社地を譲られて「与喜天神」を同地に鎮座したという記述があります。

その中で①瀧蔵権現は俗体の男神である。即ち地主であったのだ。②瀧蔵権現はもともと初瀬の地主の身として初瀬川の川上に鎮座されていたものである。③瀧蔵権現が鎮座されていた場所に、現在は「与喜天神社」が祀られており、「瀧蔵権現神社」は更に山深くの瀧倉山に鎮座されているのです。その後長谷寺の奥の院と称し、長谷寺へ詣でも同神社に参詣しなければ、ご利益が半減すると伝えられ、「今昔物語集」には、あ

多数の死者が出たが、しかし、「女一人、男三人、子童二人が谷の底に落ちたけれども、露ほどの疵も無く助けられた。この生還した者達は、前生の宿業が良かった為であって、神の助け、観音の加護こそがあったからである」と言われ、瀧蔵権現と長谷寺の十一面観音の表裏一体の御加護であることを示している。それ以降、瀧蔵権現を「本地主」と与喜天神を「今地主」と称しているのです。

次に巻七「宇多院除春宮御脳建立長勝寺第七・付美徳門院御利生事」という文書には、「日天子に嫁いで男子をもうけた尼が、美徳門院（藤原得子）が出産する予定の女子と取り替え男子に転じた為とする。男子は後の近衛天皇であり、尼は瀧蔵権現である」と記されています。

巻下第一「当寺末建立前帰此山者成所願事第一・付諸人得益事」という文書には、信濃国更級郡の新長谷寺（信濃長谷寺）の縁起について述べられている。白介翁は両親の菩提を弔うため、長谷寺創建以前の舒明天皇（六二九〜六四一）の時代に、初瀬山で十一面観音の利生を得たという。白介は、観音の使いである童子の教えに従い、最初に出会った女

性を妻とした。信濃に帰って後、女性と観音の加護により、男は領家代として成功し、新長谷寺を建立した。それは、女性の正体が瀧蔵権現で、長谷観音の使いとして、白介に新長谷寺を建立させるために更級郡にや

つてきたのであります。そして、目的を果たした女は自身の正体を明らかにし、初瀬の地に帰って行ったのであります。「長谷寺験記」には、瀧蔵権現は性別に揺れがあり、男神・女神のどちらにも解釈されています。之については、まだまだ研究の余地があるのでは無いでしょうか。

四、瀧蔵権現と長谷山口神

卷下第一において、女(瀧蔵権現)は、白介の前に「童子」を連れて現れた。そして女が姿を消すと童子も空に昇って行ったが、その童子は長谷山口神(「我は、長谷寺山口の神也」であったという)「長谷寺験記」の序文においては、天照大神の託宣を手力雄神から伝えられた徳道が長谷寺を建立したと記すのが、この手力雄神を祭神としたのが長谷山口神社であります。

(注) 手力雄神と女神(豊秋津姫)の関係から、瀧蔵権現には豊秋津姫の神格が投影されているのでは無い

かとする説があります。

又、瀧蔵権現と長谷山口神は、共に農業神であり、水神・雷神としての共通の性格を兼ね備えていたのでは無いでしょうか。

五、瀧蔵神社の神像

昭和三十年(一九五五)岡田泉師氏による同神社の神殿開扉記録によると、以下の神像が納められていた。

①中殿 女神坐像(六六センチ)・瀧蔵神像画幅(比丘尼像、応永十一年(一四〇四)・虚空蔵坐像)

②右殿 半身女神像(七五センチ)・童神坐像(三三センチ)

③左殿 男女神像(七〇センチ)・立像六軀(二〇センチ前後)「疱瘡神」と墨書された家形厨子・聖観音坐像

(注)「瀧蔵神像画幅」以外の制作年代は不明としながらも、中殿の女神坐像について、薬師寺の「貞観像」を遡る可能性を示唆している。更に、瀧蔵権現と紀伊国熊野神社の新宮「速玉男神」と同神説を指摘する説もあります。

フェスタ参加の報告

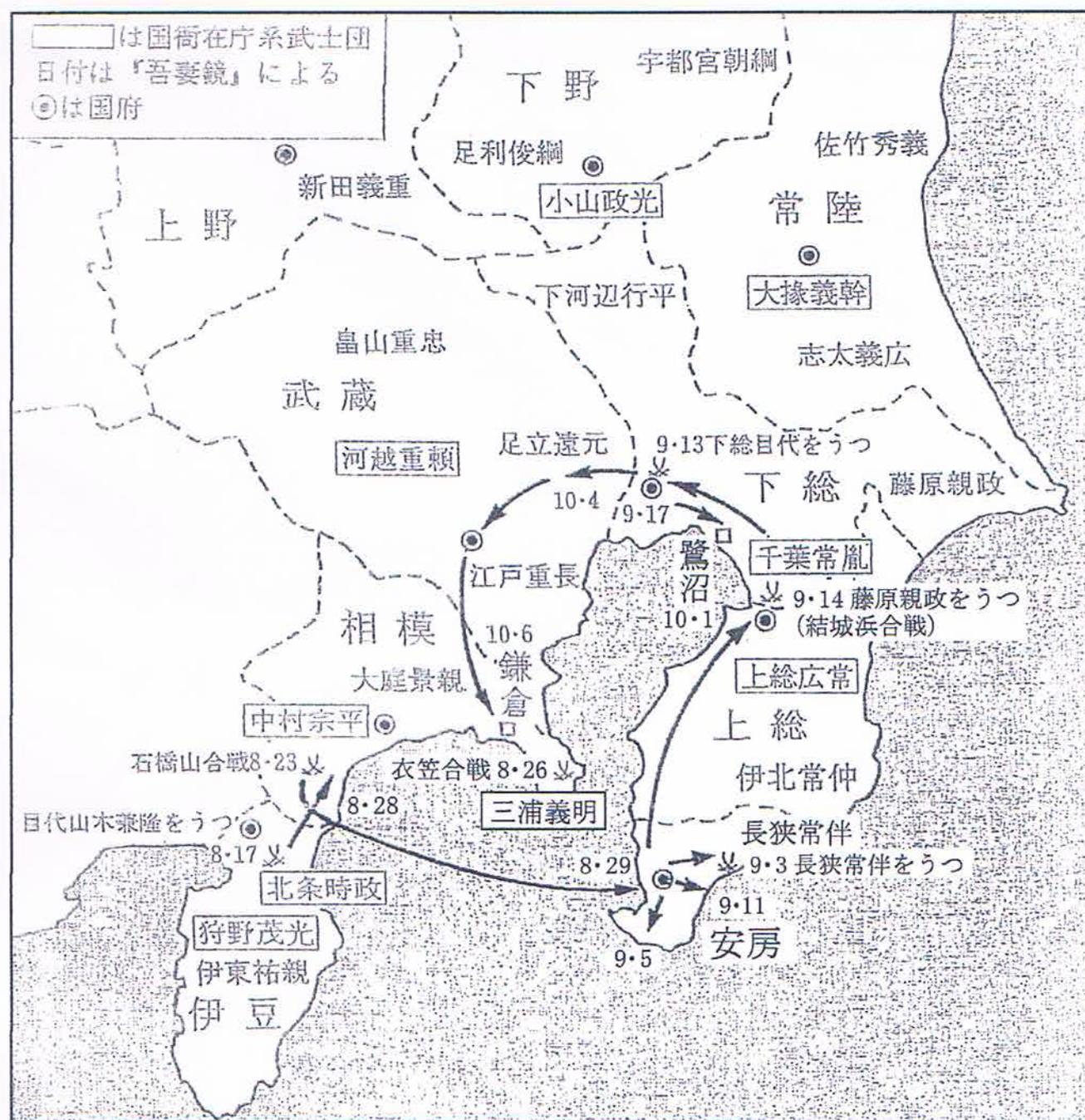
昨年十一月二十三・二十四日の二日間千葉市民活動支援センターのフェスタに参加しました。その概要を三頁に掲載しました。詳しくは本会のホームページを見て下さい。

トピックス「御船山合戦」

房総半島中南部に御船山という小さな山があります。ここはその昔室町時代大きな戦いがあつた所です。時は永禄十年(一五六七)織田信長は美濃国稲葉山に齋藤龍興を滅ぼし、此処を岐阜城と改め、自身の居城としたのです。その頃房総では小田原の北条氏と安房の里見氏が度々争い永禄七年(一五六四)国府台合戦に続いて永禄十年、西上総の三船山(富津市と君津市の境)に於いて戦つたのです。長い間両氏は此の地域に於いても闘つてきたのですが、八月二十三日、北条氏政、氏照の父子は真里谷(木皿津市)方面から三船山に登り陣所(君津市)に結集した。総勢三千騎と言われますが、この小さな山に三千騎の兵と馬が集結するのは物理的に無理だろうと思われる。一方、里見軍は勝浦の正木大膳亮を

八幡山に潜ませ、父の里見義堯は三船山の南虚空蔵山(富津市障子谷)に陣して、子の義弘は西南八幡の森(富津市相野谷)に陣取りして、矢戦が始まると、北条軍を出来るだけ引き寄せてから、待ち伏せさせておいた正木軍百騎に合図して横から切り込み攻撃させた。北条軍は、混乱し、道に迷う者、退却する者が続出した。八幡山の北方に「蓮沼」という沼があり道不案内の北条軍は、朝霧のために次々と泥沼にはまり、身動きが取れなくなつて行ったのである。こんな中で武蔵国岩付(さいたま市岩槻区)から参加の大田氏資は五十二騎の兵を率いて北条軍に参戦していたが、此の戦で全員が討ち死にしたと言われている。里見義堯は九月八日、岡本城(南房総市富浦)の实子里見義頼に「敵は退散したので、我々の満足は、この上もないものだ。」と伝えている。そして義弘も又弟の義頼に「敵の退散したことは再三申すようだが大慶である」と喜びを伝えている。このように、第一次国府台合戦及び第二次国府台合戦と二度に亘り、北条軍に敗れた里見氏が三船山の合戦に勝利して、房総の地に勢力を回復したのであります。

治承4年(1180) 頼朝 源氏再興の兵を挙げる 《千葉氏が大きく貢献》



平治の乱(1159年)で父源義朝が破れ、源頼朝が伊豆狩野川の旧中洲“蛭ヶ小島”に流された(14歳)。治承4年、雌伏20年伊豆豪族北条時政等の援護の下、伊豆目代の山木兼隆を討った後、石橋山で平家方追討軍の大庭景親に敗れ、真鶴岬から安房に逃げ房総で再起を果たし遂に鎌倉に東国軍事政権を樹立する。

「池田の池」現地見学の概要

去る三月十九日、本会勉強会の一環として、久しぶりに「池田の池」の現地見学を行いました。その歴史を振り返って、現地を歩きながら、千葉の昔を考えてみたいと思います。太古の昔、千葉市街地の大半は大きな内海となっていました。五千年前より七千年前に起きた縄文海進により、海食崖が削られ、内湾に砂州が形成されて、陸地や沼沢地が出来てきました。此の時代に「池田の池」と言われる低湿地が現在の市街地東部（本町・亀井町・鶴沢街等）に形成されたのです。

此の低地は、西が砂州で陸地化した土地であり、南は千葉大学のある亥鼻台地、東は都小学校や延命寺のある都町台地、北は登渡・椿森台地に囲まれています。此の地区に、東南東から都川が流入し、沼や沢が沢山出現したと考えられます。（下図参照）。此の地図にある点線の中が「池田の池」と「低湿地」と言われる地域を示すものです。

今回集合して戴いた本町公園はもと土地が隆起しており、池の一部だとは考えにくいです。



もう少し都川の上流に進み、亀岡橋付近から都川に沿って東に進と、童橋があり、此の橋の下に旧中溝川が流れ込んでいます。現在は暗渠になっています。この辺りの都川の水深が最も深い場所と推定されます。

更に、都川を上流に進むと左は低湿地、右は亥鼻台地であり、支川都川との合流地があります。池の端と思われる小路は、都町五叉路付近が東南端で、青葉の森通りに沿って北に向かいますと、都町小学校のある台地に突き当たるので、この小路は北に進みます。ここは都町小学校と延命寺のある台地との間に低地が東に確認され、この地に弥生時代の遺跡（住居跡）も発掘されています。また、最近までは延命寺の東側に小さな池も確認されています。此の延命寺や諏訪神社下を西に進んで右側の台地と左の湿地の間に農家が並び豊かな農地が広がっていたのです。

千葉常重は大治元年（一一二六）に上総の大権（土気）から此処に移って池や湿地を干拓し、私営田領地を造成したのです。戦前は県立の農業試験場の試験田であったが、先の大戦で千葉市は大空襲で被害を受け、此処の農地は陸地化され市営住宅が

建設されて、宅地化が進みました。次に北側は国道五一号があります。これは低地にあり、かなり古くて、池との関係が良く解りませんが、途中に旧中溝川が残っていますが、水源地が開発され、水の流れはほとんどありません。

その先、北側から葭川が流入して、千葉市民会館の前を通って南へ進み、都川に合流します。この川が池田の池と合流していたということ、その経緯も難しいです。国道五一号の道場バス停から南に小路があり、まさに池の端の名残のように小路が続きます。此処に「ちびっこ広場」と言う公園があり、地質調査のため試掘された場所です。更に進んで、本町小学校の裏門に続き、小学校の中を通って最初の亀岡橋まで小路は続きます。これからも調査して下さい。

（担当）高野利太郎

編集後記

大変遅くなりましたが、第七号をお届けします。この会報について、ご感想、ご意見をお寄せ下さい。又、会員の研究成果を是非発表の場として活用して下さい。高野まで

〇九〇一三〇八五七一一三〇